

第二十回 高校生小論文コンクール

主催 公益財団法人生涯学習振興財団
共催 読売新聞西部本社

優秀作品の紹介

個人部門

● 沖永荘一博士記念大賞（最優秀賞）

「アートの魅力を広めたい」

学校法人東京女学館

東京女学館高等学校 二年

近藤里香さん

グループ部門

● 最優秀賞

「出雲発！漂流ゴミ問題」

学校法人永島学園 出雲西高等学校 二年

橋本 開さん 岩浅智大さん

山根加蓮さん 嘉藤秀美さん

尾添龍太さん

● 優秀賞

「新しい世界論」

学校法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ

ISAK ジャパン 二年

伊藤滯里さん

● 優秀賞

「あなたは何しに福岡へ?!」

福岡県立久留米高等学校 三年

森田晴香さん 池田若葉さん

石橋美寿輝さん 後藤美菜さん

牟田 暉さん 山内茉莉香さん

● 読売新聞西部本社賞

「お地藏さんが教えてくれたこと」

福岡県立三池高等学校 二年

田中涼佳さん

● 読売新聞西部本社賞

「介護ロボットは普及できるのか」

学校法人安田学園安田女子中学高等学校二年

村井萌萌子さん 相原陽菜さん

大久保陽菜さん 庄野真白さん

西村もえさん

以上6作品を優秀作品として紹介します

沖永荘一博士記念大賞（最優秀賞）

学校法人東京女学館

東京女学館高等学校 二年

近藤 里香さん

「アートの魅力を広めたい」

まず、私のお気に入りの絵を紹介しよう。
フィンセント・ファン・ゴッホの「夜のカフェテラス」（図①）である。小学生の時に母



図①：夜のカフェテラス

の街に現れる暖かい光のカフェテラスで街の喧騒を忘れて、癒されるという印象があるからだ。このカフェにはモデルとなった店が実在している。いつかフランスを訪れた際には立ち寄ることを夢見ている。アート一枚から大きく夢が広がる。何度観てもワクワクする想像力が湧き上がってくるのだ。私の他にもアートによって心が癒されたり、豊かになったりしたことがある人は少なくないだろう。

私は幼い時から絵や書道が好きで、表現することも鑑賞することも大好きだった。現在は学校の文化祭の実行委員長としてデコレーションやオブジェを創り上げているところだ。その作業を将来は住んでいる街に置き換えてワクワクするアートのイベントとして展開していきたいと考えている。

私の夢はアートをもっと身近にすることである。なぜアートは必要なのか。中学三年生の時、修学旅行で沖縄を訪れた。戦時中の厳しさを物語るガマや優しい笑顔で迎えてくれた地元の人々と触れ合うことで感じ取ったものを絵（図②）で表した。ガマから見える美しい海と月桃の花。



図②：中3の時に描いた「命どう宝」

が教えてくれた一枚であり、私は一目ぼれした。この絵が好きなのは、夜由は、夜の街に現れる暖かい光のカフェテラスで街の喧騒を忘れて、癒されるという印象があるからだ。このカフェにはモデルとなった店が実在している。いつかフランスを訪れた際には立ち寄ることを夢見ている。アート一枚から大きく夢が広がる。何度観てもワクワクする想像力が湧き上がってくるのだ。私の他にもアートによって心が癒されたり、豊かになったりしたことがある人は少なくないだろう。

そこで私が問題視しているのは日本の文化予算が他の国に比べて少ないということだ。これを比較したグラフ（図③）を見ると一目瞭然だ。一番予算が高かったフランスは国が先導して文化振興に力を入れている。一見アメリカは日本より文化予算は少ないが、その分を多額の寄付金で補っている。つまりアメリカは民間に任せて文化を守っている。日本

ある。なぜアートは必要なのか。中学三年生の時、修学旅行で沖縄を訪れた。戦時中の厳しさを物語るガマや優しい笑顔で迎えてくれた地元の人々と触れ合うことで感じ取ったものを絵（図②）で表した。ガマから見える美しい海と月桃の花。

世界中の毎日をワクワクさせていきたい。

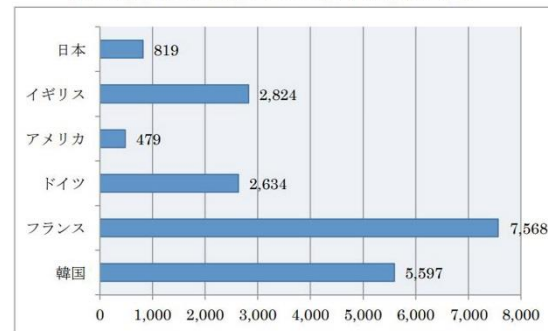
● 引用元

図①

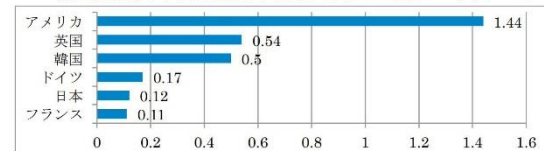
フィンセント・ファン・ゴッホの
「夜のカフェテラス」
オランダのクレラー・ミュラー美術館所蔵

図③：文化庁：諸外国に於ける文化政策等の
比較調査研究事業・H30.3 報告書より

各国の国民1人あたりの文化予算比較（円）



調査対象国の個人寄付の比較（対 GDP 比） 単位：%



図③

文化庁…諸外国に於ける文化政策等の比較調
査研究事業・平成三十年三月報告書

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/r1393024_04.pdf の十五ペー
ジと十九ページ

もこのような文化政策により、国によるア
ート援助ができればよいと考える。

自分ができることとしては、アート活動に
参加することから始めたい。アートの魅力を
伝える手段はいくらかあるように思える。自
分自身が作り手となることはもちろん、学芸
員として作品の解説を行う、アートコンシエ
ルジュとして企画運営やプロデュースをする
ことでアートをより多くの人に知ってもら
うなどの方法がある。公共施設に絵画やオブジ
ェを飾るというのも一つの手だ。例えばホス
ピタルアート。私が通っていた病院の壁にも
心温まる絵が飾られていた。病気の方にも文
化的生活を提供して一瞬でも心を癒してもら
うことが大切だ。アートに触れることで目に
見えて健康になるだとか、幸せになるだとか
の値は測れない。しかし私は言葉や数字にな
らない感覚も大事にするべきだと思う。病を
抱える人にとって、その感覚は救いになるこ
とがある。私が病院の絵によって気持ちが楽
になったように。

このように人々のエネルギーになるアートを
広めていきたい。自分自身がアートを発信
していくことで日本全体がアートに関心を持
ち、国の文化予算の改善にも繋がればよいと
考える。アートに関わって日本中はもちろん

個人部門

優秀賞

学校法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ

I S A K ジャパン 二年

伊藤 澤里さん

「新しい世界論」

ソーシャルメディアを使う私たちは、常に世界の動きに振り回され、テレビの前の子どもたちは、世界規模に夢を描く。AppleとAmazonは新しい形の国家を築こうとしている。

私の親友は、パレスチナのガザ地区出身である。「天井のない監獄」と呼ばれるガザには、電気も医療物資も足りていない。毎日のように家の近くに落ちる爆弾。あきらかにハーグ条約に違反する威力の大きい銃弾で撃たれ、脚を無くした人々を目にするのが日常となっている。それでも人々は抗議を続け、国境が開く日を待ち望んでいるのだ。そうであれば、彼らに未来の可能性はない。

私は他国の人権問題に取り組む日本人や、発展途上国の子どもたちのために、汗を流す人を見てきた。彼らは日本の人々を啓発する講演会やキャンプを開き、国内で寄付を募る。そして何より困っている現地の人たちから頼られている。彼らの奮闘する姿を見て、いつも私は、彼らのように格好よく生きたいと思うのだ。ところが同時に、違和感を覚えることがある。

日本はパレスチナ・イスラエル問題について中立国であるため、日本人ひとりの意見は問題に反映されづらい。国境では、日本人がデモに参加することを目的として、パレスチナに入ることを許されない。どんなに日本人が心を寄せても、ずっと手を繋いで戦うことはできない。国家であるためのさまざまなル

ールが、お互いに「干渉するな」と、見えないう壁を建てているのだ。

私の親友の国と私の住む国は、世界が違いうのだろうか。私が将来海外で勉強をしても、海外で働くことになったとしても、私が日本人である限り、彼らのために何もできないのではないだろうか。もし私が、パレスチナの抗議活動と一緒に石を投げ、アフリカの子どもたちが働いている工場でボイコットを起こし、カナダの先住民と一緒に彼らの生活を守り、アメリカの選挙で投票することができたら、私は、世界の不公平に対する怒りと、それを解決できないことに対する違和感や無力感を抱えながら、この場にいなかったかもしれない。

私の学校には多様な国から生徒が集まっている。私が日本の歴史と文化を誇らしく語ることができるよう、彼らも自分たちの国について語る。彼らは自分のルーツを愛しているが、母国を離れ、日本に来ることに価値を見出したのだ。現代には、新しい価値観を得るために世界を旅する人々が大勢いる。国家単位だった社会がグローバル社会に合流し、世界の人々の興味は確実に「海外」に向けられてきているのである。

私は、国家はいらないと思う。私たちの思いは国を超えているのに、まだ能力は国に抑えられているのだ。情報は光の速さで世界に広がり、物資も世界中から流れ込んで来る。世界に点在する多国籍企業の時価総額は、アフリカ全土のGDPと肩を並べ、オセアニアを優に超えている。ここまで自由にテクノロジが発達した世の中で、人々の行動が制限されているのは不自然なのだ。

国連が世界政府となり、国家が地方議会となればよい。人々は住みたい地域に引っ越し、世界の法律に従えばよいのではないだろうか。いずれにせよ、世界を分断する国家が、市民に対し、また国家同士に権力を行使し合っている現状が、正しくないと私は思うのだ。

私はパレスチナの人々を救う夢を描いている。難民が帰りたい場所に、旅人が行きたい土地に受け入れられる世界を強く願い、人種や宗教による分別がない社会に思いを巡らせている。国家をなくすことは不可能に聞こえるかもしれないが、国家が崩壊しても、人々はパスポートを失うだけで、今までに築いた文明は失われない。国境など気にしていなかった人々が、新しい社会を立て直せばよいのである。

読売新聞西部本社賞

福岡県立三池高等学校 二年

田中 涼佳さん

「お地藏さんが教えてくれたこと」

私の家のリビングにあるテレビ台の中に、一体の小さなお地藏さんが置かれている。名前はまさかちゃんだ。まさかちゃんはこの世に生まれてくることができなかった私のお姉ちゃんだ。

子宮外妊娠を知っているだろうか。これは、受精卵が子宮内膜外に着床してしまうことで、約1パーセントの確率で起こるといわれている。たった1パーセントと思う人もいるかもしれないが、大切な命が生まれてこられないまま亡くなってしまうのだ。私の母は「病院で、かわいい赤ちゃんが生まれてとても幸せそうなお母さんたちの姿を見ていると、どうして自分は母になれなかったのだろうと、とても辛かった。生んであげられなくて、助けてあげられなくて、ごめんね」と思ったと話してくれた。お姉ちゃんとは言ったが、実は母の体から手術で取り出された2ヶ月のまさかちゃんは、まだ性別もわからない小さな小さな塊だった。しかし、お医者さんは「心臓らしきものが作られていた」とおっしゃったそう。両親は、生まれてくることができなかった我が子に、二人の名前をとって「まさか」と名付けてお地藏さんとして置いていくのだ。私はこの話を聞いた時、とても複雑な気持ちになった。生まれてきたくても生まれてくることができなかった命があるということ。親になりたくても、なれない人がいるということを知ったからだ。さらに「もし、まさかちゃんが生まれていたらお姉ちゃんがいいたのになあ」と残念がる、まだ幼かった私

に、両親はこんなことを話してくれた。「まさかちゃんが生まれていたら、1歳も違わなかったから、涼佳は生まれていなかったんだよ」と。まさかちゃんが生まれてこられなかったから私が生まれることができたのだ。私はこのことを重く受け止めなければならぬと思う。まさかちゃんのみまで精一杯生きていかなければならないのだ。

私は、将来看護師になりたいと思っている。私が病院に入院して、一人で不安で寂しかった時、話し相手になってくれたり、一緒に遊んでくれたりして気持ちを明るくしてくれたのは看護師さんの存在だった。病気の時には、私と同じように患者さんや家族は不安でいっぱいだろう。そんな時、そっと心に寄り添い、そばにいて笑顔にしてあげられるような看護師になりたい。さらに、助産師の資格もとってまさかちゃんのように生まれてくることができない命の一つでも多く救いたい。そして、まさかちゃんから学んだ「この世に生まれてこられるということは本当に奇跡なのだ」ということも伝えていきたいと思う。

今、私は精一杯生きているだろうか。勉強も部活もそれなりに頑張っているが、精一杯とは言いい切れない。こうして生きていることを当たり前のことだと思わず、感謝の心を持って自分の夢を実現するために努力していこうと思う。まさかちゃんは今日も、テレビ台の中から私のことを応援してくれている。

「出雲発！漂着ゴミ問題」

～海岸清掃及びマイクロプラスチック

問題についての考察～

学校法人永島学園

出雲西高等学校 二年

尾添 龍太さん
嘉藤 秀美さん
橋本 開さん
山根 加蓮さん
岩浅 智大さん

I、インターアクトクラブの環境保全活動について

創部52年の出雲西高校インターアクトクラブは環境保全活動を中心に、部員数36名で活動しているクラブである。今回は、海岸清掃とマイクロプラスチックの問題について考察したことを述べたいと思う。

1) インターアクトクラブは年間5回海岸清掃を行っている。清掃を行ってみると日本のゴミだけではなく韓国、北朝鮮、中国、ロシアのゴミが60%もあることがわかった。私たちは海外からのゴミを減らすために、島根県庁の文化国際課に相談し、日韓の高校生の交流会を企画、一緒に出雲市の海岸を清掃して、ゴミを減らすための討論会を行っている。この国際交流は今年で7年目である。

2) このような活動と交流を続けていくうちに、韓国の高校生たちは、韓国のゴミが一番



年5回海岸清掃するインターアクトクラブ

多いことを反省し、韓国に帰ってゴミを捨てない運動をしてくれるようになった。海岸清掃をすると、韓国のゴミが少しずつ減ってきている。また、

討論会の時に

問題となったのは、最近その悪影響が懸念されているマイクロプラスチックについてであった。私なりに調べてみると全世界で1年間に3億トンのプラスチックが生産されている。プラスチックは海に捨てられると5mm以下に小さくなる。これがマイクロプラスチックである。世界中の

海には、約5兆個のマイクロプラスチックが漂っていると推測されている。これを魚介類が食べ、私たちもそのマイクロプラスチックを食べた魚介類を食べている可能性は十分にあると思われる。

そこで私たちは、島根県庁の廃棄物対策課の方々に相談し、マイクロプラスチックの調査を行うことにした。



日韓の海洋ゴミ問題について討論会を実施

II、2018年度NEAR（北東アジア地域自治体連合）プロジェクト海辺の漂着物

調査～マイクロプラスチック試行調査要領～について島根県庁の方から教えていただいた。

ア・調査目的

生態系への悪影響が懸念され、世界的に關心が高まっているマイクロプラスチックについて、身近な海岸における存在の実態を把握するため「NEARプロジェクト海辺の漂着物調査」において試行的に調査を行う。

イ・調査時期・回数

1回／年、秋季
（原則として9月～11月）

ウ・調査場所

原則として各自
治体一海岸（※複数の海岸で実施することも可）

エ・調査方法

原則として、次の方法により、概ね1mm以上、5mm以下のマイクロプラスチックを採取する。

A 「海辺の漂着物調査」調査区画近辺の砂地を調査場所として選定する。

B 縦20cm、横20cmの正方形の区画を設定し、表面の大きなゴミ（5mm超）をできるだけ除去する。

C 区画内の砂を約2・5cmの深さまでバットに採取する。（砂採取量の約1000cm³）

D 採取した砂から5mm超のゴミを除去するため、バケツの上で5mm目ふるいにかける。

● 1・砂の粒径が1mm超の場合（水による浮上分離）



マイクロプラスチック調査方法は（NEAR方式：20cm角、深さ2.5cm）砂を採取しふるいにかけて個数を数える

① Dのバケツに水約2リットルを入れ、よく攪拌する。

② バケツ内の上澄み液を浮き上がった浮遊物ごと1mm目ふるいに流しこむ。

③ ①②の操作をもう1回くり返し、最後にふるいに残った浮遊物を採取する。

④ 採取した浮遊物をバットに移し、色や形状からプラスチックと判断されるゴミを集め、個数を数える。（風が強い場合はビニール袋に入れて、袋の外側から個数を数える）

⑤ 調査票に記録する。

● 2・砂の粒径が1mm未満の場合（ふるいのみによる分離）

① Dのバケツ内の砂を1mm目ふるいにかけて、1mm未満の砂、ゴミを除去する。

② ふるい上の試料をバットに移し色や形状からプラスチックと判断されるゴミを集め、個数を数える。（風が強い場合はビニール袋に入れて、袋の外側から個数を数える）

③ 調査票に記録する。

オ・調査結果に関する留意事項

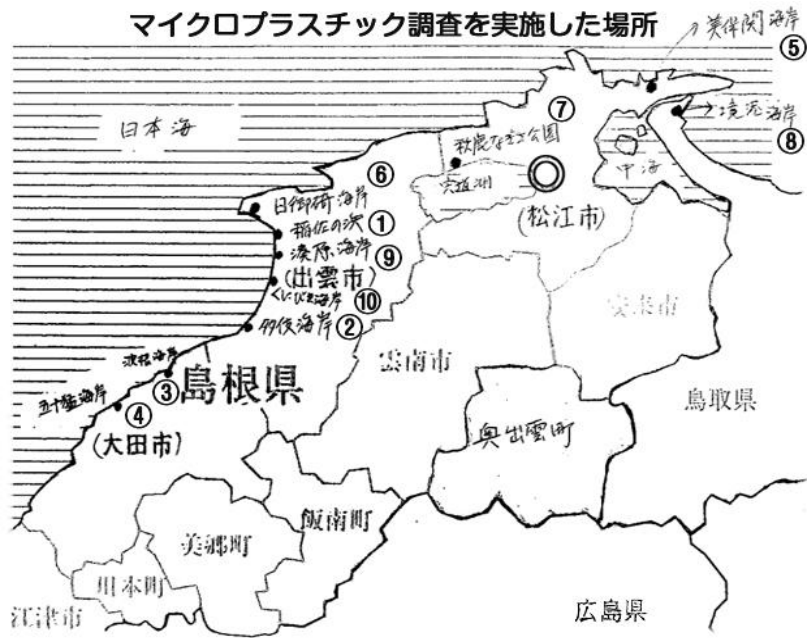
● 本調査結果は、あくまでも海岸の一地点における調査結果のため、海岸全体を代表するものではない。

● 水による浮上分離を行う場合（●1の方法）は、水より比重が大きいプラスチックは沈降するため採取できない。

この調査内容をよく読み、昨年の11月に島根県庁の廃棄物対策課の方と共に出雲市くびき海岸で調査を行った。

海岸は、それほどゴミの落ちていない箇所
で、波打ち際より8m離れた所で行った。結果はプラスチックゴミが135個もあり、とても驚いた。プラスチックが分解されるのに450年かかることや海洋ゴミの中でプラスチックゴミが74・2%も占めていることがわかり、プラスチックゴミの問題は深刻で

あることが明らかなので、島根県、鳥取県の海岸で調査をしようと部員同士で話し合った。



まず、平成30年9月～10月にかけて世界に先駆けて10箇所調査を行った。最初の調査は、比較的きれいな海岸である出雲市の①稲佐の浜②多伎（たき）海岸で行った。稲佐の浜は出雲大社のある大社町の海岸で観光客が数多く訪れる場所である。地域の人も毎週のように清掃を行っている。神無月には全国の神様が集って会議をされる浜辺といわれているだけに、この場所のマイクロプラスチックの数は8個。きれいな海岸であった。次は②出雲市の多伎海岸にて調査を行った。この多伎海岸は海水浴客も多く、キララ多伎という道の駅もあり、サーフィンをする人も多い。そのため地域の人たちもよく掃除をされており、マイクロプラスチックの数は11個であった。調査は1日2箇所が限界であるため、日を変えて大田市の③波根海岸と④五十猛（いそたけ）海岸で調査を実施した。③④ともに大田市の漁港であり、漁師町として

有名な地である。全体的には清掃されていたが、部分的には汚れている場所もあった。結果は③波根海岸は32個④五十猛海岸は25個であった。また別の日に、⑤島根半島の東端の美保関海岸と⑥西端、日御碕海岸の調査を行った。この⑤⑥の海岸には、有名な美保神社と日御碕神社があり歴史的にも名高い所である。地形的には岩場が多くマイクロプラスチック調査は困難を極めた。また、この地は半島の東端と西端のためゴミが引かかりやすい場所である。結果は⑤の美保関海岸は47個、⑥の日御碕海岸は49個であった。

また、部員から宍道湖はどうだろうか？とか県外にも調査に出てみるだろうか？という意見もあり、日を変えて、⑦宍道湖なぎさ公園と⑧鳥取県境港海岸の調査を行った。⑦宍道湖なぎさ公園は、湖なのでプラスチックゴミは少なく7個であった。⑧の境港海岸は、ウィンドサーフィンの有名なスポットであり、掃除はきちんとされていた。ただ、清掃会社が集めたプラスチックゴミは数多くあり驚いた。このように島根県、鳥取県には海外から流れ着いた廃タンクや、発泡スチロールのゴミが山のようにある。これは本当に深刻な問題である。⑧の境港海岸のマイクロプラスチック数は12個であった。

最後に、出雲市で汚い海岸といわれている⑨湊原（みなとばら）海岸と、⑩くにびき海岸の調査を行った。⑨湊原海岸⑩くにびき海岸も、島根半島の西側に位置し、湾になっており、ゴミのたまりやすい海岸である。私たちインターアクトクラブも毎年2回は海岸清掃を行う場所である。この湾は、海外のゴミやポリタンク、大きな漁具などが数多く流れ着く。しかし、地域の人たちが清掃をする様子はほとんどない。そのため、汚れ放題の海岸である。この⑨湊原海岸のマイクロプラスチックの数は59個、⑩くにびき海岸のマイクロプラスチックの数は62個であった。

また、⑩くにびき海岸で発泡スチロールが粉々になった状態をみると、そのゴミが飛散して川や海に流れ、それを魚が食べ、さらにその魚を人が食べる姿が具体的に想像されて、とても恐ろしい気持ちになった。



漂着する発泡スチロールも大きな問題

Ⅲ、プラスチックの削減を！

海へのマイクロプラスチックの流出を減らすためには、海岸のプラスチックゴミの清掃回収活動は重要であると思う。島根県、鳥取県の一部の海岸を見ると、①稲佐の浜8個、②多伎海岸11個、⑧境港海岸12個と清掃回収活動が盛んな海岸はマイクロプラスチックの数は少なく、優良な海岸であった。しかし、清掃回収活動の少ない出雲市の⑨湊原海岸は59個、⑩くにびき海岸は62個という多さであった。

この結果から地域の人たちが自分の住む海岸をきれいにしようと清掃回収活動を進んで行うことが重要であるとわかった。また、海に流入するプラスチックは陸上に住む私たちの暮らしの中から出てくるものだということである。そのため私たちが日常生活の中で使うゴミになるプラスチックを減らしていく必要があるのである。最近、アメリカの一部の州やEU諸国では、レジ袋の禁止や削減が法制化された。また「スターバックス」はプラ製のストローを廃止した。また「ガスト」全店でも廃止されるようである。これらの事例は、環境保護の観点から見て、たいへんプラスになると考える。

現代の科学技術を駆使し、木や紙をうまく使い、代替技術の開発をすることも重要である。アメリカの先住民の言葉に「我々は子孫から大地を借りて生きているのだ」というものがある。私たち人類は、未来の世代から借りているこの地球を汚さずに返す責任があるのだ。450年も分解されないプラスチックを地球上に残さないように意識の転換が必要である。コンビニやスーパーで弁当や飲み物を買う時、本当にレジ袋が必要なのか。マイバッグを使うべきではないかと考えることが重要なのである。そして、環境汚染、環境負荷の少ないプラスチックに変わる代替物を真剣に開発する努力を早急にすべきではないかと私たちは考える。



出雲市大社町の稲佐の浜のような美しい海岸を取り戻そう

参考資料

日経ナショナルジオグラフィック社のホームページ

<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/web/18/053>

000010/053000001/

優秀賞

「あなたは何しに福岡へ!？」

く本物志向で地域活性化を目指すく

福岡県立久留米高等学校 三年

後藤 美菜さん

牟田 暉さん

石橋美寿輝さん

池田 若葉さん

森田 晴香さん

山内茉莉香さん

一・研究の目的・動機

福岡を訪れる外国人観光客に日本のよさを伝えるとしたら、初めに県内のどこを思い浮かべるだろうか。地元だけではなく、他県からも幅広い世代の方が訪れ、多くの外国人に出会う場所といえば、太宰府天満宮を思い浮かべるだろう。太宰府には、豊かな自然と歴史ある天満宮など魅力が盛りだくさんだ。そこで、太宰府に焦点を当てて、どのようにして外国人観光客を増加させ、地域活性化につなげられるかを考えた。さらに、高校生の目線で考えたアイデアをいかして、さらなる福岡の発展に貢献したいと思った。

二・仮説の設定

太宰府天満宮周辺には、梅ヶ枝餅や土産ものを売る店ばかりが多く軒を連ねている。そのため、太宰府にある店舗は外国人受けのする表面的な観光客狙いのおもてなししか提供できていないのではないかと考えた。

太宰府にある店舗



外国人観光客狙いの表面的なおもてなし?

三・調査方法

筑紫女学園大学で開催された2日間のサマーカーンプに参加し「観光客の目線で太宰府観光の今を考える」「まち歩きをして身近に埋もれた観光資源を探す」という内容で太宰府の魅力について調査した。

四・調査内容

(1) 福岡の国際化の現状

福岡は国際都市として世界で注目されている。Asia Week 誌にて「アジアで最も生活しやすい都市」第1位として1997年から2000年の間に3回選出された。

旅の楽しみの一つとして買い物がある。データによれば中国の旅行消費額が年々増加していることがわかる。「爆買い」という言葉が2015年に流行語年間大賞に選出されたが、ある団体バスツアーの一日の旅程表を見てみると、福岡タワーから始まり太宰府観光最後は天神でショッピングという流れになっている。私たちが実際にインタビューした外国人も、ツアーの中心はショッピングで、太宰府が主な目的地ではなかった。しかし、近年では買い物などの「モノ」消費から、日本の文化や習慣を体験・交流する「コト」消費に移行している。

(2) 筑紫女学園大学でのフィールドワークを通して

実際に太宰府の参道を歩いてみると、スターバックスコーヒーや他のお店でも言語表記の多様化が見られ、外国人観光客のニーズに合わせたサービスが増えていた。また、ゴミ箱を減らしたり、電柱が地下に埋め込まれていたり、街全体の景観に配慮した工夫もなされていた。一方、賑わいは参道が中心で、古くからある店舗は閑散としていた。

私たちは、天満宮の参道から少し離れた場所にある呉服屋の「利久」で太宰府観光の実態について話を伺った。その中で「外国人に太宰府の本当の魅力が伝わっていない。本当

外国人観光客向けのサービス



言語表示の多様化→



だったが、現在では参道が観光スポット化した影響によりお店が廃業してしまったそうだ。この二人の店主のお話から「今まで培われていた美しい日本文化を後世に引き継ぐ」という思いと、外国人に合わせて日本文化を安売りする現状とがかけ離れていることに違和感を持たれていることや、受け継いできた日本の伝統文化の地である太宰府への熱い思いを感じた。

日本文化を安売りする現状



違和感

に心から日本文化を学びたいと思っている人に来てほしい。グローバル化に影響されすぎず、地元住民がこだわりを持った地域づくりをしたい」とおっしゃった。

また「有岡畳店」にも話を伺った。昭和中期までは参道、天満宮を含め、地元の人たちの生活の場

し、それは視点を変えないと見えないのだ。そこで私たちが考えるこれからの地域活性化を目指すキーワードは「グローバル」だ。「グローバル」とは「グローバル」と「ローカル」の造語で、地球規模の視野で考えながら、地域視点で行動することである。

私たちの考える本物志向とは、地元住民がこだわりを持った地域の伝統や特色を観光の中にかすことだ。太宰府はグローバル化の影響により、住民の地域への愛着が観光に反映されにくくなっている。グローバル化の推進と伝統文化を守り伝えることをうまく融合させることができれば、魅力的な観光地となり、地域全体の活性化をさせていくことができる。

グローバル化の推進

+

伝統文化を伝える

=

魅力的
活性化

五、仮説の検証

仮説で立てた通り、参道のほとんどの店舗は、言語表示の多様化や和風の土産を提供するなど、表面的な太宰府観光に力を入れているように感じた。一方、参道から離れた昔からある店舗は、周りのお店がグローバル化していく中で、疎外感を感じておられた。

六、結論・まとめ

調査の結果、昔からの地元根差した店舗は、グローバル化に合わせて変わっていく参道の店舗とは観光客に対する姿勢が大きく異なり、本物志向を保とうとしていた。賑わいの少ない通りにも観光資源はまだある。しか

「時間旅行イン太宰府」太宰府に眠る歴史に触れる」

体験プランの概要

○テーマ

昭和20～30年代にタイムスリップ

○ターゲット層

外国人観光客

○時間

1泊2日の民泊

○ねらい

①太宰府の歴史、日本の礼儀作法、文化を知る。

②未発見の魅力に気づく。

○具体的な方法

1日目は、九州国立博物館で太宰府の歴史を学んだ後、天満宮を参拝。呉服屋「利久」で着付け体験を通して着物の着方や振る舞い、化粧のしかたを学ぶ。その後、茶道の基本作法を学び、自分でたてたお茶を飲む。

2日目は、有岡豊店

の協力を得て、畳を使ったコースターやランチョンマットなどの小物を作る。その後、参道の梅ヶ枝餅のお店の方々に協力してもらい、自分の好きな具材をおもちの中に入れて、オリジナルのものを作る。

提案したこのプランにより、参拝し、参道で買い物をして帰るだけになっていた太宰府観光が、地域や人とのふれあいを通じて「モノ」消費では得られない体験となり「また訪りたい」というリピーターの獲得にもつながるはずだ。



今後、2020年の東京オリンピックや福岡で開催される世界水泳、ラグビーワールドカップで観光客の増加が見込まれる。福岡の魅力により多くの人に伝えるための絶好のチャンスだ。太宰府だけでなく、世界遺産に認定された三池炭鉱や沖ノ島など、外国人に馴染みのない観光名所も、体験や交流を通して新たな福岡の魅力が発信できるはずだ。私たちが推奨する観光のグローバル化を太宰府から福岡へ広げていくとよいと考える。

参考文献

- ・「太宰府自慢」太宰府天満宮文化研究所
- ・筑紫女学園大学ホームページ
<https://www.chikushi-u.ac.jp/>
- ・福岡県庁観光課ホームページ

<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/9101222/>



※写真はイメージです。

グループ部門

読売新聞西部本社賞

「介護ロボットは普及できるのか」

学校法人安田学園

安田女子中学高等学校 二年

相原 陽菜さん

西村 もえさん

村井萌萌子さん

庄野 真白さん

大久保陽菜さん

昨年、学校で介護ロボットに関するディベートがあり、私たちのグループは介護ロボットについて興味を持ったので調べることにした。調べていくと介護ロボットは開発されているが、一般家庭において使えるような普及はほとんど進んでいないということがわかった。そこで私たちは、なぜ介護ロボットの普及が進んでいないのか理由を調べ「普及を妨げている事情を解消することで、介護ロボットを普及させることはできるのか」というテーマを掲げ研究することにした。

まず、日本の介護の現状を調べた。すると高齢化が進み、高齢者が増えているにもかかわらず、介護者の人数が足りていない。介護のために離職する人が増えているなど、介護に関して困難な社会現象が起きていることがわかった。私たちは、便利であろうはずの介護ロボットの普及がなぜ進んでいないののだろうかと疑問を持った。

まず、インターネットを利用して介護ロボットが普及していない理由を調べてみたところ、三つの理由がわかった。一つ目は市販されている介護ロボットの多くは高額で、なかなか購入することができないという「コストがかかる」という面。二つ目は、「万が一ロ

ボットが暴走したら？」「突然故障してしまったら？」というロボットならではの不安が引き起こす「安全性が保証されていない」という面。三つ目は、介護ロボットの供給側である開発メーカーと使う側である介護福祉施設のマスマッチが原因で起きる「実用的でない」という面。この三つが主になって普及が進んでいないことがわかった。

次に私たちは、介護ロボットを実際に使う側、使われる側になった時の意見を知りたいと思い、10代、20～50代、60代以上と三つに分けた世代からそれぞれ100人ずつ、合計300人に「介護する側になった際とされる側になった際に介護ロボットを利用したいか」というアンケートを実施し、介護ロボットが普及していない理由を探った。

アンケートの結果は200名からの回答を得ることができ、全体の約60パーセントの人が介護ロボットを使うことに否定的であった。

その理由として、

10代はコミュニケーションが大切。

20代・30代は人間の方がよい。

40代は人間の方がよい。

50代は人のぬくもりが大切。

60代以上は人間の方がよい。

が主な意見だった。この結果からどの年代にも共通していえることは、ロボットを使用したくない。ロボットに介護されたくないと思っていることで、その理由の大半は人のぬくもりの方が大切ということだった。

そこで、今回の調査で明らかになった介護ロボットが普及しない原因は「コストがかかる」「安全性が保証されていない」「実用的でない」の三点に加え、アンケート調査でわかった「人のぬくもりが大切」ということに対して解決策はないか考えてみることにした。

一つ目の「コストがかかる」ことを解消するためには現行のロボットの材料と変わらぬ性能で安価な材料を利用するなどいろいろ考えた。しかし、介護ロボットに関して深い知識を持たない私たちは、なかなかいい案を出すことができなかったため、インターネットで調べてたところ、年々介護ロボットの値段が下がっていたり、自治体によっては補助金が出ていたりしているので、介護ロボットが世間に普及して価格が手頃になったり、全国の自治体が補助金を出してくれるようになるまで待つしかないのかもしれないと思った。

次に「安全性が保証されていない」ことを解消するためには、先が鋭利でないものや表面がざらついていない材質を使って、ロボットの角を丸くしたり、スポンジなどの柔らかいもので角を覆ったりするなどの工夫を凝らすことで、介護をする側もされる側もけがをすることなく介護ロボットを使うことができるのではないかと考えた。

三つ目の「実用的でない」は、供給側である開発メーカーと利用する側である介護福祉施設とのミスマッチが原因で起こっているのだ、これを解決するためには、介護ロボットを製作している会社が社内に介護施設を作ったことで介護ロボットを実際に利用することで、現場の声を聴くことができ、改善点なども明らかにする。改善を繰り返していくことにより介護現場のニーズに合った介護ロボットを作ることができるのではないかと考える。近年さまざまな場でロボットの活躍が進んでいる。例を挙げれば、スマートフォンのAIアシスタントやペッパーくんなどである。導入当初はそれほど普及していなかったけれど、今や私たちの生活に定着し、なくてはならないものになっているように、介護ロボットも生活になじんでいけば、日常的に使われるようになるはずであると私たちは考えた。

最後に「人のぬくもりが大切」という点の解消法は、アンケートの結果から、ロボットに無機質なものというイメージがついていることがわかったので、それを払拭するために、例えば、電気で人の体温と同じに保つことで人の温かさを再現し、人の皮膚のような柔らかい材質でロボットを覆うことで人の肌を再現するなど、形からでも人間味を出すことで、ロボットが持つ無機質というイメージを少しでも払拭できるのではないかと考えた。そして、ロボットが怖いという意見もあったので、もっと介護ロボットのことを知ってもらい、触れ合えるような機会が増えれば改善できるのではないかと思う。

周りの人の影響を受けることも多い国民性の私たち。誰かが介護ロボットを使い始めれば、多くの人が介護ロボットを使うきっかけになるのではないかと考える。そこで、介護ロボットを製作する会社側が地域ごとに試しに使ってくれる人を選び、期間を決めて無料で介護ロボットを貸し出して利用してもらうことで、介護ロボットがどのようなものかを理解してもらい、その利便性を印象づけることができれば、その普及にはずみをつけられるのではないだろうか。

そのような機会があれば、積極的に参加して、周りの人々にいい影響を与えることで、介護ロボットの普及に貢献したいと私たちは考えている。